

## 税金は支え合い

沖縄県立開邦中学校3年 中村 有佐

「あ、そうそう。このピンクの紙、忘れずに持って行ってね。」

私はある病気を抱えている。特に直接命に関わるような大きな病気ではないが、去年から治療を続けている。しかし、自分に合う薬が見つからず、毎月通院をしなければならない。私の場合、一回受診し、薬を受け取るだけで一万円近くかかってしまう。治療するために必要なのは分かっているが、それを親に毎月払ってもらうのは、少なからず後ろめたさがあった。この病気にかからなければ。そんな治療に対して少し悲観的になっていた私の気持ちを変えてくれたのは、一枚のピンクの紙だった。

私が住む地域では、今年の四月から、こども医療費助成制度の対象が中学校卒業までの児童へと拡大された。これまで通院する場合の医療費の負担は三割だったが、ピンクの証明書を病院で提示すれば、全額負担してくれるようになったのだ。このことにより、私の病気への後ろめたさは軽減された。治療に対して前向きな気持ちになれたのだ。

これは、「税金」があってこそのことだ。もし税金がなければこのような制度は作られなかっただろうし、私の気持ちの変化も起きなかっただろう。もしかしたら、治療に対しての負の感情が増えていたかもしれない。このような制度のおかげで治療に対しての負担が減った親や子供も多くいるだろう。また、私のように病気に対して前向きに向き合えるようになった人もいるだろう。

このような出来事から、私は税金の大切さを改めて感じさせられた。また、以前は、税金は大きな事業で使われているのだろうと遠い存在のように感じていたが、こんなにも身近で私達を支えてくれていたのだと気付けた。また、税金を納めることは、誰かを勇気づけ助けられることと同じで、目には見えない人と人との支え合いなのだと思う。正直、消費税が引き上げられた時は少し不満もあったが、それだけ支えられる、助けられる人が増えたのだと考えると、税金を納められることに対して、誇りを感じられるようにもなった。

私は今、税金があるからこそ、学校に通えて学習もでき、怪我や病気になれば医療機関を受診し、治療を受けられる。これは、今、税金を納めてくれている人がいるおかげである。だからこそ、私は将来、税金によって今を支えてくれた全ての人達、これからの未来を担う次世代の人達に対して、恩返しやサポートの意味として、税金を納められるようになりたい。そして今後、税金を通して支え合いの心が広がってほしいと思う。